資源環境経済学特別演習Ⅱ　議事録
2015年度　第6回

報告題名(title)：歴史的文化を資源とした観光事業のための住民移転政策の評価に関する研究 -烏鎮を例として-			
報告者(name)	唐　美玲	日時	11月5日　午後3時～
所属分野(labo)	環境経済学	場所	第9講義室
座長	武居　史弥	議事録担当者	石塚　修敬

出席者

冬木、高篠、U-Nichols、黒岩、嶋倉、秀、武居、Tian、千葉、佐藤、石塚、ﾁﾘｹﾞﾙ、ｿﾘｺﾞｶﾞ、唐、吉田、趙、李

報告要旨(Abstract)

烏鎮（ウチン）は中国浙江省の桐郷（トンシャン）にあり，上海、杭州、南京の三つの大都市のほぼ中間に位置している。十字の運河は烏鎮を四つの部分にわけて、地元の人がそれぞれ「東柵、南柵、西柵、北柵」と呼びます。昔ながらの水郷風景を持って、明清時代の民家が残されていました。

東柵と西柵は観光地で、南柵と北柵は生活区です。東柵は 1999 年に観光区として開発されて、2001年にオープンさせました。東柵の観光化の成功により桐郷（トンシャン）政府は 10 億元(約 200 億円)の資本を投じて 2003 年西柵を開発して、2007 年にオープンさせました。

東柵観光区に住民がそのまま住んでいますから、旅行開発会社は観光区に管理にくいです。従って、西柵開発の時に、東柵の経験により、統一に管理しやすいために、地域住民に全員を移転させました。この移転政策は西柵に住んでいた住民にもたらされる被害がないでしょうか。確かに、立ち退き移転者は移転に伴う補償金をもらいます。しかし、この補償金は一時的に経済上の補償しかないで、移転した後の生活上のさまざまな側面で長期的な影響を受けると考えています。だから、この疑問点を持って、移転した後の影響を受けることを明らかにします。

立ち退きに伴い、彼らの生活環境、人間関係、精神上に影響をもたらすかどうかを明らかにします。以上により、観光事業移転政策に評価することを目的とします。

観光会社、西柵住民にインタビューを通して、同じことを聞いて、違いのところを明らかにするつもりです。そして、実際の事例を通して、私の理論を証明するつもりです。

質疑・応答(Q＆A)

質問者①：ソリゴガ

Q:レジュメ２ページ目のスライド６番について、「政府」とあるが、省、市、どのレベルか。

A:桐郷(ﾄﾝｼｬﾝ)市である。

Q:ここにある「投資」はどういった面に使われたのか。

A:市の作成した具体的な計画である。

Q:その中で、建物、生活支援等どういう目的に使われたのか。

A:住民の移転、地域の再整備、観光地としての建物の修繕に使われた。

Q:住民はどこに移転させられたのか。

A:烏鎮(ｳﾁﾝ)にマンションを建て、そこを提供している。

Q:住民は意志と関係なくそこに移転させられたのか、自由な選択は考慮されたのか。

A:マンションの提供が不要であれば、補償金だけ受け取り他の地に住む住民もいた。そのマンションに住むことを選択した住民たちの中で、何階に住むか等の選択及び相談が行われたかは不明である。

Q:移転そのものは強制であったのか。

A:強制性はあった。

Q:移転後の生活への補助は行われているのか。

A:おそらくそういったものは行われていない。

Q:補償金の金額推定はどのようにして行われているのか。

A:住宅の面積やリフォームの状態を元に算出しているが、具体的な算出方法は不明である。

Q:次に、「幸福感」と「満足感」について、生活の満足度は高くても幸福感は低いことも考えられるが両者をどのように比較するのか、なんらかの定義や基準はあるのか。

A:満足の基準は回答者の主観に依存するものと考えられる。

質問者②：高篠助教

Q:幸福感はアンケートで聞くのか。

A:そのつもりだ。

Q:その結果(指標)を経済水準(指標)と比較、分析するのか。

A:アンケート内の５つの項目の中に自分の経済状態について聞く項目がある。

Q:その５つ自体が幸福感を出すということなのか。

A:そのつもりだが、この５つ以外にも指標は考えられるかもしれない。

Q:次に、中国ではこのような移転政策はよくあることなのか。

A:観光目的では史上初である。今後観光地政策でこのような事例が出ることも考えられる。別の目的での移転政策は行われている。

Q:今回の事例から今後のあり方や他の移転政策事例へのアドバイスをする、という流れか。

A:その方針である。

Q:予想される結果やそれにより考えられる事など、現段階でイメージあるか。

A:そこまでの見通しはまだ立てられていない。

質問者③：冬木准教授

Q:他の目的で行った移転政策に関する先行研究との比較を行うことで研究に厚みが増すので、そういったものにアクセスすると良い。

A:現段階では取り入れていなかった、参考にする。